

# まちづくり×SDGs 住み続けられる「地域」とは 認知症カフェの在り方について

11 住み続けられる  
まちづくりを



3 すべての人に  
健康と福祉を



キーワード

まちづくり・認知症カフェ・家族支援

## ○取り組んだきっかけ

卒業研究のゼミ班でSDGsに関連した研究テーマを検討した際に、認知症を呈したご本人そしてご家族がどのように地域で暮らしているのかについて着目したのがきっかけです。地域の拠り所となる認知症カフェの存在意義やコロナ禍での対応について調査研究を行いました。

## ○具体的な内容

認知症カフェとは、認知症の人やその家族が気軽に立ち寄れる空間のことであり、住み慣れた地域のなかで気軽に集え相談できる場所です。認知症の方を含め全ての人々が地域で住み続けるために地域で展開される認知症カフェは重要であると考えます。しかしながら新型コロナウイルス感染への対応により認知症カフェの開催が困難となりました。そこで、このような状況下でも全ての人が安心して楽しく参加出来る認知症カフェの実施方法について地域特性なども含め明らかにしていきたいと考えました。

具体的な取り組みとして、実際に静岡県内で認知症カフェを運営する方々へのインタビューとアンケート調査を実施しました。コロナ対応により対面式での認知症カフェ開催が困難な状況の中、オンライン型認知症カフェに取り組む施設もありました。運営側として、パソコン・WEB会議ツール等の契約金、そしてWEB会議ツールの操作が分かる人材がいれば実施が可能であるということがわかりました。また、インタビューから得られた課題は、次の3つです。

課題①ボランティアの方も含め高齢の方が多いため、参加するためのWEB会議ツールの操作や参加を促すメールの送受信が困難な参加者が多いこと。

課題②以前は周辺地域への紙媒体での情報宣伝により広く周知できていたが、インターネットへの嫌悪感からか周辺地域の方や新規参加率が減少してしまったこと。

課題③オンライン型認知症カフェになると、対象者同士で好きな時に好きな話をそれぞれするという事は難しくなり、今までのようにプログラムの休憩中に地域の方と話すのがとても有意義な時間となっていたのがオンライン形式では再現しにくい。以上のように、様々な課題があることがわかりました。地域にとって必要だから運営していく方が良いということは、関係者の皆さんは十分に理解されている中で、どのように継続していくべきかを考えた際に、今まで経験したことのない、全く新しい取り組み方が必要となりました。

## ○活動の目的

認知症カフェは現在では認知症を呈したご本人だけでなく、その家族にとっても地域の拠り所となっています。しかしながらコロナ禍の期間、認知症カフェが通常運営できない状況にあることを知りました。そこでコロナ禍での認知症カフェの取り組み状況について調査し、今後どのような取り組みが望まれるのか検証しました。

次に、これら3つの課題に対する対応方法をまとめてみました。課題①に対しては、参加者の理解を深めるために少人数での対面によるパソコンやスマホ操作の講習会を実施すると良いと考えます。道具の使い方を学び合う関係は新しい地域のつながりを生むと考えました。課題②に対しては、まずはスタッフ間でオンラインの活用からはじめ、オンライン型認知症カフェに参加できる環境を整えることが必要だと考えます。課題③に対しては、コロナ前から運営費用が問題として挙げられており、さらにオンライン化を行うために機器導入等の費用が必要となるため、行政等の支援も必要不可欠であると考えました。

一方で、オンライン化は地域格差がなくなり遠く離れた人でも参加可能なため、運営費用の問題で認知症カフェの継続が困難である場合は、元々参加していた方にほかの地域のオンライン型認知症カフェについて情報提供することで、新たなつながりの提供や孤立化に対する不安軽減に寄与することができると考えました。

今後もオンライン等の代替手段を活用し、人とのつながりを維持することで、気軽に交流できる場や困ったときに助け合える場を提供することがコロナ禍における認知症カフェ、そして誰もが暮らしやすいまちづくりの理想的な在り方ではないかと私たちは考えます。



## ○期待される効果

認知症カフェの運営方法に新たな選択肢が生まれていきます。コロナ禍によって地域の中で一旦滞ってしまった流れを、再び動き出すきっかけづくりとして、この調査研究は寄与できるのではないかと思います。

教員名 村岡健史  
所属学部・学科 保健医療学部  
作業療法学科  
職位 講師



連携先  
県内の認知症カフェ運営事業所